

北海道自然保護団体連合通信

北の自然

第
21
号

1982年 4月20日



屈斜路湖の遠望

本誌は再生紙を利用しています——自然と資源を大切に!!

高原道路計画に反対する活動等についての報告。北海道大学自然保護研究会は、学内を走る道路計画について、日高問題に関しては、去年十一月の東京集会報告。青い海と緑を守る会からは、去年七月に行なった、知床横断道路事後調査の結果（今年も継続）、国立公園内の伐採計画及び一〇〇平方メートル運動の状況、さらに、知床特別鳥獣保護区実現について報告された。最後に酪農大で自然保護研究会から、自然観察会報告がなされました。

同日 午後五時

大森司紀之氏（北大歯学部助教）による「北海道の動物保護と今後の課題」と題した講演がなされました。講演記録については、次頁に掲載します。

講演終了後、参加者一同による交流会が開かれ、ざくばらんな意見交換の場となりました。

三月七日 九時

昭和五十七年度予算案が事務局より出され、堅い予算に修正され、決まりました。

続いて、各団体報告に移ります。大雪と石狩の自然を守る会から、ヒグマ大学・チビッ子探検学校の

1981年度会計報告

1981. 3. 1~1982. 2. 28

(収入の部)

(支出の部)

科 目	'81予算額	'81決算	備 考	科 目	'81予算額	'81決算	備 考
会 費				管 理 費			
団 体 会 費	150,000	114,000	未収金 50,000	事 務 所 費	532,000	456,600	
賛 助 会 費	855,000	314,000	未収金 333,000	事 務 費	1,350,000	1,283,877	
(小 計)	(1,055,000)	(428,000)		通 信 運 搬 費	600,000	240,520	
事 業 費				旅 費 交 通 費	800,000	718,457	
カレンダー	4,200,000	2,374,800	未収金 600,000	会 議 費	30,000	10,205	
絵ハガキ	480,000	378,090		図 書 資 料 費	40,000	43,650	
粉 石 け ん	1,400,000	290,400	未収金 490,000	印 刷 費	200,000	0	
バ ッ チ	200,000	188,000		(小 計)	(3,552,000)	(2,753,309)	
合 本	150,000	132,500		事 業 費			
書 籍	50,000	38,660		カレンダー	1,600,000	800,000	未納金 850,000
(小 計)	(6,880,000)	(3,402,450)		粉 石 け ん	1,000,000	500,000	未納金 400,000
活 動 費				バ ッ チ	683,000	683,000	
第12回シンポジウム	0	82,000		ル ー プ タイ	125,000	0	
81環境週間行事	0	1,081,500		合 本	0	160,000	
(小 計)	(0)	(1,163,500)		(小 計)	(3,408,000)	(2,143,000)	
寄 附 金				活 動 費			
センター費	200,000	154,000		印刷製本費	1,140,000	59,500	シンポジウム 77,180
カンパ	90,661	119,500		集 会 費	200,000	1,008,328	環境週間 931,148
(小 計)	(290,661)	(273,500)		会 場 費	0	8,000	安全な食品 参加費
雑 収 入				(小 計)	(1,340,000)	(1,075,828)	
受取利息	5,000	4,120		備品取得費	300,000	0	
(小 計)	5,000	4,120		(小 計)	300,000	(0)	
日高協議会からの返済金	0	100,000	残 900,000	積 立 金	500,000	0	
(小 計)	(0)	(100,000)		(小 計)	(500,000)	(0)	
借 入 金	0	380,000		そ の 他	0	10,000	全国連合加盟費
(小 計)	(0)	(380,000)		小 計	0	(10,000)	
前年度繰越金	910,339	419,339	前年度 仕訳参照	合 計	(9,100,000)	(5,982,137)	
合 計	9,100,000	6,170,909					

1982年度活動方針

3月6日、7日の両日開かれた第14回北海道自然保護シンポジウムにおいて、1982年度の活動方針が決められました。次のとおりです。

活動方針

- 日高中央横断道路計画に反対し、林道等現在進行している自然破壊を監視し、改善を求める。
- 道東の湿原を将来に渡り保護するため、自然公園法の網をかける。
- 大雪山縦貫道路計画の復活を監視する。
- 北海道の希少動物保護のため、その普及・要請を行う。
- 函館山周遊道建設・横津岳スキー場建設に反対する。
- 知床国立公園内国有林伐採計画に反対する。
- 知床横断道路沿線のなしくずしの観光開発に反対し、通過利用・無施設地区とするように働きかける。
- 大規模林業圏の大規模林道「滝雄・厚和線」建設工事の中止を求める。
- 河川・湖沼・海洋を汚染もしくは富栄養化させる物質の利用や排水の仕方を改善する運動を推進する。

第14回

北海道自然保護シンポジウム報告

例年に比べ、いく分雪解けの早い、三月六・七日に、第十四回北海道自然保護シンポジウムが開かれました。会場は北海道クリスチャンセンター。四年目をむかえる日高中央横断道路問題、知床国立公園内の横断道路の実態、大規模な流域下水道計画、相変わらず「開発」は、休むことなく押しよせてきます。山岳ばかりでなく、湿原についても、道路計画・河川改修等々、数知れぬ状態です。さらに極めて数が減ったといわれる、ゼニガタアザラシなどの、動物に対する保護も急務とされています。私たち、自然保護の活動は、高波でかじをとる船といったところでしょうか。年を経るごとに、その内容は深くなりつつあります。こうした中であって、自然保護教育も、着実に成果をみせています。ゆっくりではありますが、しっかりと根とった活動が今後も続けられることでしょう。

岩内という、具体的対象の中で、自然保護運動としての原発問題は、今後一層、考えなければならぬと思います。

以下、シンポジウムの内容を報告します。

三月六日 午後二時

昭和五十六年度活動報告ならびに会計報告が事務局より出され、承認されました。(決算報告については、次頁参照)次に各団体の活動報告がなされました。

(社)北海道自然保護協会からは、委託調査(主に十勝川電源開発)についての報告。帯広畜産大学自然保護研究会から、日高中央横断道路計画の中、中札内村々民へのビラ入れ・対話についての経過・状況が説明された他、合成洗剤追放の取り組み、ゼニガタアザラシ調査、全国学生自然保護集会について報告されました。十勝自然保護協会からは、日高道路問題の取り組みの他、札内ダム建設計画に対する学習・調査、大樹・浦河線道路の調査(今年夏を予定)、士幌

新加盟団体のよこがお

哺乳類研究グループ

海獣談話会

昭和43年、哺乳類研究グループの中のオットセイを研究しているメンバーが中心になって行った研究会がその始まりです。昭和48年7月のこの会で、ゼニガタアザラシが日本から姿を消すおそれ、その保護の必要性が話されて以来、「研究」と「保護」を柱に、活動が続けられました。

この会によるゼニガタアザラシの調査は、昭和48年12月より始められ、昨年に至るまで計7回、一斉調査という形で行われています。根室半島の太平洋岸から襟裳岬にかけての、主な上陸場に、一斉に入って観察を行い、記録をまとめて発表しています。

保護運動の方では、天然記念物指定の答申がされたのにもかかわらず、指定されないままの状態が続く中で、関係省庁への要望書提出といった行政への働きかけ・根室や釧路で懇談会を開催し、地元の人々との意見交

換などにつとめていきます。昨年6月には調査と同時期に札幌の地下街で写真展を開き、広く市民の人々に、ゼニガタアザラシの現状をアピールしました。アザラシの親の愛らしい姿に、立ちどまって写真に見入る人も多かったようです。

今年は、調査に資金援助をしている世界野生生物基金日本委員会や、ここ北海道自然保護団体連合と共に、署名運動に力を入れ始めました。また、懇談会や写真展も計画しており、一斉調査も行うことになっています。貴重な資料を失わないためにも、この調査は今後、継続されていかなければならないものではないでしょうか。

ゼニガタアザラシだけでなく他の海獣についても話し合われ、哺乳類研究グループのシンポジウムの際などには、それまでの活動について広く討論がなされています。

海獣がより深く理解され、保護運動の輪が広がることを望みます。

(文責 宇野 裕 之)

経過と近況・成果について、さらに、下川の高レベル核廃棄物処理計画に対する学習・取り組み、石狩川の浄化(サケがのぼれる川に)等が報告されました。南北海道自然保護協会は、流域下水道計画の問題点・宇井純氏を招いての話し等。シマリス・自然友の会からは、会の目的、これまでの取り組み、特に街路・景観に対する提言、自然保護の学習等について、札幌周辺の自然を考える会からは、市内の大規模民間墓地計画反対の取り組み経過及び市との環境協定の意義。大雪の自然を守る会からは、休眠状態ではあるが、今年は、再びヌプントムラウシ林道調査を行うことが話されました。

反核・反原発 アピール提案出される

討論の中で参加者から、六月の軍縮総会を前にして、反核の世論が盛り上がりを見せ、岩内原発も動きが活発化している。自然保護団体も反原発・反核のアピールを出すべきではないか、という意見が出されました。この提案に対して、賛成、一部反対、時期尚早など、長時間に亘り論議されました。まとめますと、

自然保護・環境保護の立場から、

安全性の確認されていない原発は最大の破壊につながり、核の問題も戦争と合わせ反対すべきである。時期的なことを考えれば、今回のシンポジウムで決議した方が良く、とする賛成意見。反核・反原発

ではなく、「反核」については、決議する。原発については、日本のエネルギー事情からみて、将来的に必要であり、技術向上の中で諸問題は解決される、という一部反対意見。決議するだけならいいが、具体的(積極的)取り組みは、現在の連合では無理がある。今まで一度も「原発・核」については話し合われたことも、会報で書かれたこともない。とする時期尚早の意見。特に、原子力発電所の是非に関連し、安全性(技術的に考えて)が問われ、廃棄物処理(下川町の高レベル・幌延の低レベル)の問題とも合わせ活発な意見が交わされました。

最終的に、次回シンポジウム(旭川)に再度検討することになり、その間、各団体内で話し合う他、会報を通じて考えることでまとめられました。

事務局では「環境」をトータルに考えるという観点から、今回の話し合いをふまえ、次回会報から特集を企画しています。(事務局)

北海道の動物

北海道の動物―保護と今後の課題―

(大型ほ乳類を中心として)

北海道大学 助教授 大泰司 紀 之

北海道で大型哺乳類と言いますと、ヒグマとシカ、それに海獣―クジラ類を除くと鯨類であるトドや各種のアザラシがおります。

まずこれらの動物を保護する理由についてですが、ふたつ挙げることに出来ると思います。ひとつは保護したいからするという、好みで決まる面があります。ニューヨークのハレムとか、中国や中近東の森林を破壊してしまった地域に住む人達の中には、生涯自然の豊かさとか野生動物にはほとんど無縁で過す人もいます。しかし日本人全般について言えると思いますが、私の好みからしますと、非常に多様な自然があり、動物も各種いることが必要です。そういう中で日本の文化が育ってきたと言えます。狩猟をすることも含めて、動物に接し動物のいる自然の中に身を置くことによって、何故人間性と言ったものを回復できるような気がいたします。先日新聞によりますと、近年都会に自然が

なくなつたために、都市生活者の間には泊りがけで遠方まで自然に接しに行く傾向が強まったそうです。

動物を保護するもうひとつの理由として、野生獣の肉や毛皮などを資源とみなして、それを維持するための保護が挙げられます。捕り尽くしたら元も子もなくなるわけで、一定の収穫を得られるよう適当な密度に保とうという発想によるものです。

いずれの理由による保護の場合も、その地域の人間による生産活動・土地利用との関連によって、どの動物をどの程度残していくかが決ってきます。

動物保護の4つの方法

動物の保護は、その現存量を高く維持することと言い換えることが出来ます。つまり、各種の動物を保護することによって、単位面積当りの動物の体重の量(現存量)が増大します。たとえば、米田政

明氏によりますと、開拓前の北海道の哺乳動物の現存量はヘクター当たり418.5キロでした。ずっと昔、人間がいない頃にはマンモスやナウマンゾウ、それにオオツノジカやヤギウなどの大型獣がいたわけですから、現存量はもっと大きかったと考えられます。しかし現在の現存量は、森林・原野に限ってみてもヘクター当たり112キロくらいにしかありません。

この現存量を高く維持しつつ、同時に農林業・水産業・工業などの生産活動を発展させることが動物保護の方法論になると考えられます。要するに、動物達は人間に好都合のように保護される運命にあるわけですから、その具体的な方法ということになると、いろいろとむずかしくなってくるわけですが、動物の種類や地域などに応じて4つくらいに分けて考えることが出来ます。

第1はシカなどの狩猟獣の場合、ヒグマもこれに含めることが出来ます。これらの動物の扱いは狩猟学の範疇にあって、いわゆる管理(マネイジメント)を行う対象となります。第2は捕獲してもさしたる経済的な価値はないけれど、増えたら産業に対する被害が大きいため常に数を低く抑える必要

のあるもので、トドがこれに該当します。第3は、絶滅しそうな動物の場合で、手厚く保護する必要があります。今はゼニガタアザラシが課題となりますし、カワウソやラッコなどのように絶滅した種の復元も取上げる必要があると思います。第4は、動物群集として動物各種をひとまとめに保護する方法です。この場合、地域の産業や自然の残し具合に対応させて、どの動物種をどの程度残していくか、自ら決っていくと思われたい。しかし人手のつかない原始的な自然条件下での動物群集もどこかに残しておきたいわけで、そのような場所では生産活動に対する制約が課題となります。

狩猟獣の保護と管理

シカとヒグマ

明治初期の北海道では、6年間で32万頭もシカが捕獲されております。この数字や森林のシカの収容力を考え合せますと、開拓前の北海道には少なくても35万頭、普通に見積って60〜70万頭のシカがいたものと推定されます。それが現在では、手堅く見積って1万5千から2万頭くらいしか生息していません。とに角、多いと言われる地域で平方キロ当たり1頭くらい、0.1頭くらいでも「あそこにシカが

沢山いる」と言われます。しかしヨーロッパやアメリカで鹿が行われているような森林での平均的な密度は、平方キロ当り8頭とされています。本州に比較すると北海道はシカが非常に多いというところで、毎年道外からも射ちに來ていますが、道内のシカの数は非常に少ないと言いうことも出来るわけ

です。仮に北海道の森林・原野の半分くらいの面積に、しかるべき密度でシカが生息していても良いと仮定します。密度は通常の半分を押えて平方キロ当り4頭とします。すると森林・原野の面積は5万平方キロですから、その半分×4頭となり、10万頭くらいはいいても良いということになります。シカの数は毎年その1割を捕獲しても減らないとされていますから、1万頭は狩猟することが出来る計算になります。

ところで狩猟統計によりますと、道内では毎年2千から3千頭のオスジカが捕獲されたことになっており、しかし私達がハンターや剥製社の協力を得て、捕獲されたシカについて現物に当って調べた結果では、いいところ1,200頭くらいと推定されました。これは、2人で鹿猟に行って1頭捕れたよう

な場合にも、それぞれが1頭捕獲したと報告しがちだからでありま

す。——ここで道内のハンターの名誉のためにつけ加えておきますが、本州や九州では実数と報告数のひらきはさらに大きく、ひどい場合は5倍くらいになっていると見込まれます。つまり捕れないところほど、同行した人が射ったシカを、自分も射ったような気持ちになる率が高いと言えるわけです。

エゾシカは昭和の初期にはほぼ絶滅に近いところまで減少しました。それが戦時中捕獲する人がいなくなったので増えました。昭和31年から駆除と狩猟が始まりましたが、シカの分布域はどんどん拡大して、鹿解禁地や有害獣駆除の実施地域も広がり、現在では石狩低地帯以北東のはほぼ全域に生息しております。分布域が拡大したわけですから、シカの数もさぞ増えたと思われがちですが、そうではありません。分散した原因は狩猟と駆除によって追散らされた結果であり、シカの分布の中心部では連続して狩猟が行なわれておりますので、密度は低く抑えられております。分布の周辺部分は畑地や牧草地と接しているために人間の目に触れやすく、増えたように見えるわけです。つまり、シ

カが沢山いても良い分散の中心の山岳部分で密度が低く、周縁で目立つという、いわゆるドーナツ化現象が起きております。

図の1を御覧下さい。これは鹿の連続解禁年数と捕獲されたシカの年齢構成との関連を示したものです。棒グラフで示していますように、ランク3以上・連続10年以上の地域で捕獲されるオスジカの平均年齢3.6才以下となっております。オスジカを射たと言っても、ほとんどが4才以下の、角も小さく体も一人前になっていない個体であることが示されています。オスジカの体が一人前になって、

120キロに達するのは6才くらいからです。角もその頃になってエゾシカの通常の大きさになります。10才を過ぎると老齢化によって角はいびつになってきます。どうせ鹿射ちをするなら、6才から10才の大物を中心に捕るべきでしょう。ところが現状では、1本角の1才を中心とする若オスばかり捕っていて、しかるべき牡鹿はめったに捕れないでおります。

要するに、北海道では10万頭以上のシカを生息させ、毎年1万頭以上の壮齢のシカを狩猟できるはずなのに、現在ハンター達はその1割くらいの若オスで満足してい

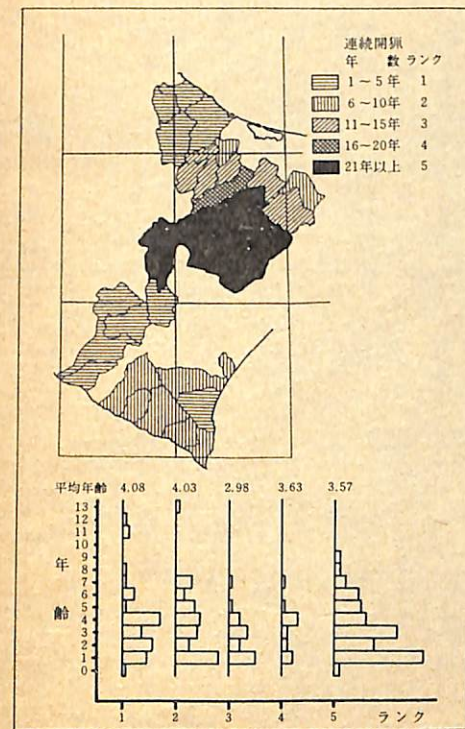


図1 上 連続開猟年数によって分けられた狩猟解禁地域
下 ランク別の年齢構成と平均年齢
(小 泉 透、1981より)

るということになります。これを改めるには、地域ごとに数を決めた狩猟を行うことが必要です。私達エゾシカ研究グループではその為の狩猟管理の方法、つまり「シカの数を適度に増やし、鹿害を相対的に低く抑え、毎年多数のシカを「収獲」する」方法を研究しております。

自然保護運動を進めておられる方の中に、狩猟、特に大型草食獣の管理に対する誤解を見受けることがありますので、ここでそれに触れておきたいと思ひます。それは、捕食者であるオオカミなどを、家畜や人に害を与えるからと言って除去している場合、シカなどは増えて過密になり、林木や畑に被害をもたらすということです。したがってハンティングによる個体数の抑制が必ず必要になっていきます。現在カモシカが問題になっておりますが、私が調べたところによると、カモシカは密猟されなくなった為に急激に増えております。昭和41年頃から取締りが厳しくなったことなどによって密猟がなくなったのですが、それまでは犬も近寄れない特定の岩場に少数生息していて、そこからはみ出した増加分が毎年密猟されておりました。その後急増して捕獲が始

たわけですが、現在では生息数の10/15%を捕獲することによって、一定の個体数に維持されるようになった町村があります。

したがって、カモシカもシカと同様狩猟獣として位置づけるべき動物です。シカやカモシカを山の中でテリリと見て楽しむのも心なごませられます。さらに鹿猟をして山林や動物について良く知ること、より自然と親しむことだと私は考えております。しかしそのためには、ハンターのモラルとか狩猟行政の面で改善しなければならぬ面が多くあることも事実です。

次にヒグマの現状について考えてみたいと思ひます。以前は害獣という側面が大きく扱われて、絶滅させても良いという意見もありました。しかし最近では数が減ってきて、ヒグマの害もほとんど問題にならなくなってきました。ヒグマは昭和30年あたりから根釧原野や十勝平野の広範囲の地域で見られなくなりはじめ、その生息域が最近に限られてしまったことは誰の目にもあきらかです。ハンター達も減ってきたことを明らかにするようになりました。しかしヒグマについてはその捕獲数が毎年500頭前後と一定しているため、生

息数も変りないという説が根強く、どうして減らないかという理由があれば考えられておりました。しかし北大ヒグマ研究グループの中では捕獲されたヒグマの分析が進められており、次のようなことが判っております(梶光一、一九八〇)。

昭和40年頃までの熊は秋の捕獲が多く、家畜や畑を荒らしに來た個体に対して、文字通り害獣駆除の要素が強い捕獲が行なわれていました。しかしそれ以後は春グマ射ちによる捕獲数が大巾に増加して、スポーツハンティングの色彩が強くなってあります。しかも春の熊では親子連れの捕獲が多く、統計上も秋より2倍の率で捕られております。つまり、昭和40年以後も捕獲数が変化しなかったのは、春の熊射ちが盛んになった為であり、総個体数を減少させると同時に、個体群維持に重要な幼獣と母獣に強度の狩猟圧がかかるようになったわけでは

ありません。近年ヒグマについても特定の地域では保護すべきだとか、このままでは絶滅しかねないので心配だといった声が聞かれるようになりました。それに対応して、有害獣駆除や狩猟で捕獲する場合の地域や頭数を制限していくことが今後

の必要であると思ひます。

害獣のコントロール

——トド——

スノウの「千島列島黎明記」によりますと、昔トドは千島列島だけで10万頭はいたそうです。千島、樺太が日本領であった頃は、繁殖地で大量に捕獲していましたので、北海道迄回遊してくる群れはなかったそうです。それが戦後回復して、15年くらい前には千島で1万5千から2万頭くらいになりました。しかし北海道で盛んに捕獲しているの、現在はその半分くらいではないかと思ひます。

昭和30年頃には、樺太を繁殖地とする群れは奥尻島迄南下しておりましたし、噴火湾には2千から3千頭の群れがやってきました。しかし捕獲が続けられた結果、樺太からの群れは利尻・礼文から浜鬼志別にかけて千頭足らず、来遊の南限は積丹半島でそれもごく少数に過ぎません。噴火湾の群れは百頭くらいに減らしてしまいました。このほか根室海峡を通して南千島に向う群れが知床半島の羅臼側を通過します。この群れは3千から5千くらいと言われておりますが、毎年その1割近くが捕獲されております。

知床の場合ですと、漁業の収入

- 8 -

販売コーナー

書籍・報告書

- ▲ 北の自然合本 2,500円
昭和50年から55年までの会報・報告書・意見書がまとめられています。
資料として1冊いかかてすか。限定100部。
- ☆ 日高現地調査報告書 1979年 500円
日高中央横断道路計画の予定ルートを調査した報告書で、植生・地形地質・動物の他、日高山脈の現状が写真でわかります。
- ▲ 根室地方の野鳥 1981年 800円
根室自然教育研究会会誌別冊です。
根室地方で観察された294種の野鳥について解説されています。
- ▲ 知床横断道路事後調査報告書 1981年 500円
青い海と緑を守る会を中心として、知床横断道路の利用実態を調査したまとめです。
- その他
- ☆ 自然保護バッチ
ネジ式 500円
タイタック式 1,000円
黒台にタンチョウヅル(銀製)のデザインです。
- ☆ 坂本直行花のカレンダー '82 1,000円
これまでは山がテーマでしたが、'82年は北海道の花(6枚づり)です。
- ☆ 坂本直行花の絵ハガキ 4 300円
サクラソウ・ツリガネニンジン・キタコブシ・フクジュソウ・ナナカマド・エゾトリカブトの6枚組です。
- ☆ 日高山脈ポスター 400円
- ▲ 無公害粉石けん 2kg 700円
10kg 3,500円

健康と環境を守るため、合成洗剤を追放しましょう。
賛助会員の方は一割引きです。(但し☆印の付いているものに限りです。)
送料は別になります。
売り上げ金は北海道の自然保護のために使われます。ご協力下さい。



編集 後記

北海道自然保護センターとして
私たちの「アジト」をもうけて、
八年目をむかえます。大雪山縦貫
道路計画に反対していた頃は、北
大トラーク会館で集まりをもって
いました。四十年代後半の頃です。
でも、クラーク会館が使用しにく
くなり、どこか、近くに部屋をか
りられないものかと、当時学生で
あった諸氏が、さがし見つけたの
が現在のセンターです。北11条西
1丁目の、地下鉄のすぐ近くであ
りながら、見つけるのに困難なほ
ど、オンボロの事務所
です。壁も、天上も黒
くて、無精な学生の部
屋を想像した方が早い
ほどの事務所でした。
それでも、一時、この
部屋に二十人を越える
人たちが集まり、ひざ
をつき合わせるように
座わり、学習会を持っ
たものです。時の流れ

とともに、この事務所を訪れる
人の顔は変わりはしましたが、オ
ンボロ事務所だけは変わらず、も
とのままだに在りました。ところが、
四月四日に真新しい、白いペンキ
に塗り変えられました。ペンキ屋
さんである曾山氏を中心に、悪戦
苦闘の末のことです。まる一日を
たっぷりついでして。下手な手つ
きで白いペンキを塗る時、今日ま
での活動と人々を思い出していま
した。走馬燈のように、次々と、
記憶は逆回転していきます。私個
人の自然保護に対する思い入れの
歴史でもあり、多くの人々の情熱
の証でもあります。
きれいに衣替えした、センター
を見て下さい。これから、どんど
ん変わっていくことと思いますが
！。

次回の会報は五月二十一日発行
です。(明子)

一九八二年四月二〇日
編集発行 北海道自然保護団体連合
代表 井手 貴 夫
事務所 札幌市北区北一条西一丁目
北海道自然保護センター内
振替口座 小樽 四〇七一
連絡先 (〇一一) 七二二一五七二四
事務局 田中 明子
印刷 岩橋印刷株式会社